

術  
數

屋敷の庭で死刑が執行される事にきまつた。その罪人は引き出された。今も讀者が日本庭園で見られるやうな飛石の一行が眞中にある、砂を敷いた廣場へ坐らされた。彼は後ろ手に縛られてゐた。家來は手桶の水と小石の満ちた俵を運んだ。それから坐つて居る男のまはりに俵をつめた、——動けないやうにくさびどめにして置いた。主人が來て、その準備を見た。満足らしく、何も云はなかつた。

不意に罪人は彼に呼びかけた、——

『お侍様、今から御仕置を受ける事になつたが、私の過は、なにも知つて犯したんぢやございませぬ。その過の元は只私が馬鹿だつたからです。何かの因果で愚鈍に生れて來たのでいつも間違をせずには居られない。だがなにも愚鈍に生れつゝ云ふわけで、人を殺すのはそりやひどい。——そんな無法は胸晴しをせずには居られない。どうでも私を殺すと云ふなら、きつと私は復讐する。——あなたが恨みを懷かせるから、復讐になる、つまり仇に報いるに、仇をもつてするんだ……』

人がはげしい恨みを呑みながら殺されると、その人の幽霊は殺した人に恨みを報いる事ができ

る。この事を侍は知つてゐた。彼は甚だ穩かに——殆んど愛撫するやうに——答へた。

『お前が死んだあとで、——自分等をおどかさすことはお前の勝手だが、お前の云はうと思つて居ることは分りにくい。お前の恨みの何か證據を——首が切れたあとで——自分等に見せてくれないか』

『見せるともきつと』男は答へた。

『宜しい』侍が長い刀をぬいて云つた、——『これからお前の首を切る。丁度前に飛石がある。首が切れたら、一つその飛石をかねで見せないか。お前の怒つた魂がそれをやれるなら、自分等のうちにもこはがるものもあるだらう。……その石をかねで見せないか』

『かまらずにおくものか』大變に怒つてその男は叫んだ、『かむとも。かむ』——

刃は閃いた。風を斬る音、首が落ちて、からだの崩れる音がした。縛られたからだは、俵の上へ弓なりになつた、——二つの長い血の噴出しが、切られた首から勢よく迸つて居る。それから首は砂の上にくろがつた。飛石の方へ重苦しさうにくろがつた。それから不意に飛び上つて、飛石の上端を齒の間に押へてしばらく、必死となつてかじりつき、それから力弱つてポタリと落ちた。

物を云ふものがない、しかし家來達は恐ろしさうに、主人を見つめてゐた。主人は全く無頓着のやうであつた。彼は只すぐ側に居る家來に刀をさし出した。その家來は柄杓で柄から切先まで水をそそいで、それから丁寧に柔かな數枚の紙で幾度かそのはがねをふいた。……そしてこの事

件の儀式的部分は終つた。

その後數ヶ月間、家來達と下部等はたえず、幽霊の來訪を恐れてゐた。誰もその約束の復讐の來る事を疑ふものがなかつた。そのたえざる恐れのために、ありもしないものを多く、聞いたり見たりするやうになつた。竹の間の風の音をも恐れた、——庭で動く影にも恐れた。遂に相談の結果、その恨みを呑んで居る靈のために、施餓鬼を行ふやうに主人に願ふ事にきめた。

家來の總代が一同の願を云つた時に、『全く無用』と侍が云つた。……『あの男が死ぬ時に復讐を誓つたのが、つまり恐れの原因であらうと思ふ。しかし、この場合恐れる事は何も無い』

その家來は頼むやうに主人を見たが、この驚くべき自信の理由を問ふ事をためらつた。『あゝ、その理由は極めて簡單だ』その言葉に表はれない疑を推しはかつて侍が云つた。『彼の最後のものくろみだけが、ただ、危険になれたのだ。そして自分が彼にその證據を見せろといどんだ時、復讐の念から彼の心をわきへ向けた。つまり飛石にかじりつきたい一念で死んだのだ。その目的を果す事ができたが、ただ、それつきり。あとはすつかり忘れてしまつたに違ひない。……だからお前達はそんな事にもう、かれこれ心配しないでもいい』

——そして實際、死人は何も祟るところがなかつた。全く何事も起らなかつた。

(田部隆次譯)

*Diplomacy. (Kwaidan.)*